

繁殖牛の放牧管理

特に子牛の市場価格向上対策

橋爪 義昭(大分県畜産試験場)

HASHIZUME, Y.: Grazing Management of Breeding Cattle, Especially to Improve the Calf Market Price

大分県では1967年から、県の中西部に横たわる広大な久住、飯田高原の未利用、低利用地の大規模農業開発が進められている。その先行事業としてこれまで粗放利用してきた山林原野を改良し、生産性の高い草地において放牧を主体とした肉用牛飼養の定着化が推進されてきたが、その実態を見ると放牧子牛の発育の遅れ、子牛市場価格の低下等の問題点がある。これを避けるため、子牛が生れて5～6ヵ月齢までは親子とも舎飼いされ、この結果貯蔵飼料の所要量を増大させ、草地改良が必ずしも増頭に結びつかない現状である。しかしながら生産子牛が放牧で育てられ初期の発育がある程度遅れても、生涯的な見方からすれば、何ら障害にならない研究成果が出されており放牧子牛の評価も高まりつつあるが、現在の子牛市場の一般的評価、及び舎飼いで濃厚飼料を多給した黒毛和種の発育標準を考慮すると、現在の放牧技術ではまだ対応できない面が多い。肉用牛の繁殖経営安定化によって戸別飼育頭数の増加をはかることが急務である。このため子付母牛の放牧期間を延長し、貯蔵飼料所要量の減量と草地利用度の向上による省力多頭飼養をはかることをねらいとした試験の成果をまとめた。繁殖牛の放牧管理を、1)親子放牧方式、2)早期離乳方式の2方式に整理し、立地条件を考慮しながら特に早期離乳方式を中心に指導を行っている。

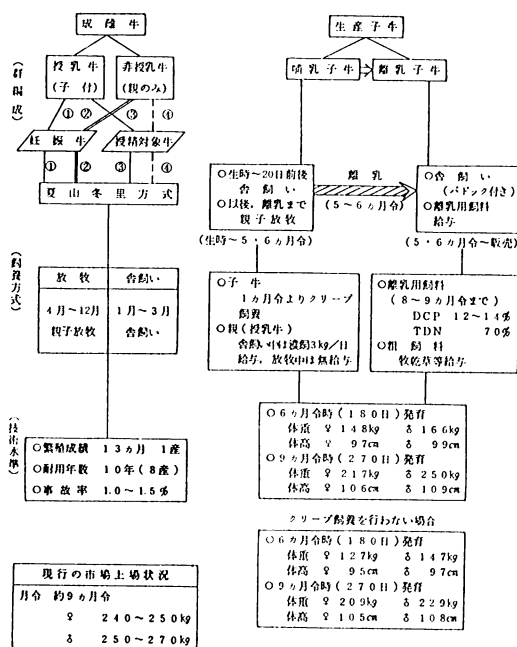
1. 放牧管理を2つの方式に整理した背景

1) 親子放牧方式

従来から行われている慣行的な方法で、生後20日間舎飼い、その後5～6ヵ月齢まで親子放牧を行い収牧後3～4ヵ月間舎飼いで濃厚飼料を多給、飼いなおしを行い市場に上場する。この方式は生涯的には何ら障害とはならないが舎飼いにくらべ発育が遅れるため市場価格が低い。このため親子とも5～6ヵ月令まで舎飼いし放牧しない傾向にある。

2) 早期離乳方式

この方法は1)の問題点を解決するための方式で、生後20日間舎飼いしその後親子放牧を行い2ヵ月齢で離乳し、子牛を舎飼いし発育増体をねらい市場価格の向上をはかる。母牛は放牧し、牧野の利用率の向上と発情を促進し繁殖率の向上をはかる。現在はこの早期離乳方式を中心に指導を行っている。しかしながら将来は親子放牧方式で草地を十分利用し、省力多頭飼養ができしかも子



第1図 親子放牧方式の飼養体系

牛の発育増体がよく、市場価値の高い放牧管理技術体系を確立する必要がある。

2. 親子放牧方式

1) 成雌牛は夏山冬里方式で、4月から12月まで放牧する。

2) 生産子牛は生後20日齢まで舎飼いする。その後5～6ヵ月齢まで親子放牧し、クープ飼養を行う。

3) 5～6ヵ月齢で離乳し子牛は舎飼いし、発育増体をはかり市場に上場する。飼養体系は第1図のとおり。

3. 早期離乳方式

1) 成雌牛は4月から12月まで放牧、ASPで備蓄した牧区があれば翌年1月まで放牧し立地条件のよいところは4月～3月まで周年放牧を心がける。

2) 哺乳子牛

(1) 一般農家は、生後20日前後2ヵ月齢までパドック放牧し、離乳後子牛のみ舎飼いし親は放牧する。

3) 群分け

群編成を4群にする。

(1) 授乳牛群(分娩後20日前後～2ヵ月齢)

- (2) 妊娠牛群
- (3) 授精対象牛群
- (4) 分娩牛群 (分娩後20日前後まで)

4) 成雌牛

(1) 放牧方法

授乳牛は先行放牧し、非授乳牛は後追放牧を取り入れる。離乳した妊娠牛は待期牧区を利用し周年放牧を心がける。

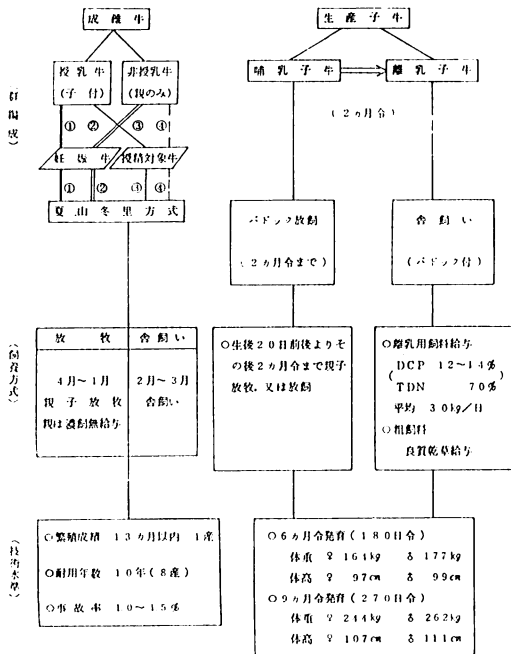
5) 子牛

(1) 離乳直後の管理

離乳前はパドック放飼するが、なるべく近くに放牧

第 1 表

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9
濃厚飼料	0.2	2.0	2.5	3.0	3.0	3.5	3.5	4.0	4.0
乾 草	0.04	0.5	0.7	1.2	2.4	2.8	3.5	3.5	3.5
日本飼養標準 に対する割合 (TDN)	—	105	115	115	120	130	132	134	127



第 2 図 早期離乳方式飼養体系

第 2 表

区 分	9ヵ月(270日令)平均			
	体高cm		体重kg	
	♂	♀	♂	♀
放牧中別飼(クリーブ)+ 離乳後舎飼なし 5ヵ月離乳+い濃飼多給	108	105	229	209
放牧中別飼(クリーブ)+ あり 5ヵ月離乳+ "	109	106	250	217
2ヵ月離乳舎飼い濃飼多給	111	107	260	244

地を設けて放牧する。離乳後は舎飼い(パドック付)し、離乳用飼料及び幼牛用飼料を給与する。

(2) 飼料給与量

早期離乳した子牛の飼料給与は第1表を目安にする。

6) 早期離乳方式飼養体系は第2図のとおり。

4. 飼養方式別子牛の發育状況

1) 飼養方式別子牛の發育状況は第2表のように体高・体重ともに早期離乳方式が市場上場時の9ヵ月齢で優れている。

5. 問 題 点

1) 親子放牧方式

- (1) 市場上場時の發育遅延
- (2) 子牛の發育にバラツキが多い。
- (3) 放牧地の立地条件によってはクリーブ施設の利用率が低下。
- (4) 飼料効率の低下

以上の問題点があるため、農家は離乳まで舎飼いにする傾向にある。

2) 早期離乳方式

- (1) 飼料費が若干高くつく
- (2) 離乳後の母乳がむだになる
- (3) 子牛用の施設が必要
- (4) 労力を多く要する

6. 対 策

- 1) 親子放牧で發育増体がよく市場性、生産性の高い放牧管理技術の確立
- 2) 放牧適応性が高く、生産性の優れた肉用牛の育種造成
- 3) 放牧子牛の市場評価の見直し(生涯的な有利性)
- 4) 放牧牛の發育基準設定と登録時にこの規準の採用